

〔書評〕

## 原田信之著『今昔物語集南都成立と唯識学』

田中徳定

『今昔物語集』は、我が国最大の、千話以上の説話を収載する代表的説話集であるにもかかわらず、謎の多い説話集である。最大の謎は、いつ頃、どのような編者によって編纂されたのかという問題である。成立時期については、十二世紀前半、保元の乱以前ということでおおよそ一致しているが、編者像については、多くの論が出され、いまだに定説をみるに至っていない。従来、『今昔物語集』の編者像については、漠然と、南都・北京の大寺院に属する僧が想定されてきた。そして、法華経関連の説話が多く収載されていることから、天台系の大寺院が擬せられ、おそらく比叡山での成立か、と考えられてきた。

しかし、このような成立説に反し、多くの外部徴証は、南都成立を示唆していた。その代表的なものは、『今昔物語集』の最古写本にして、現存諸本の祖本と目される「鈴鹿本」の存在である。「鈴鹿本」は、天保年間に、鈴鹿連胤が、奈良のさる人物（名前は明らかでない）から購入し、代々鈴鹿家に伝えられた本である。後に、鈴鹿家から京都大学に寄贈され、現在は国宝に指定されて

いる。「鈴鹿本」は、その書写状況の中に、『今昔物語集』の成立に関して有力な手がかりを残しているとみることができる。「鈴鹿本」は、書写状況を示す次のような特徴を持つている。三人以上の手による書写であること、同一説話を繰り返し書写したことに気づいて一話を墨で抹消している箇所があること、目移りの誤写について訂正の貼紙が附されている箇所があること、また、巻三の目次にあたる部分が白紙のままであり、説話番号も空白であること、説話全般にわたり、人名・地名や堂塔の高さや和語の自立語の語幹にあたる部分で、空欄になったままの箇所や語があることなどである。これらの書写状況の特徴から、『今昔物語集』原本は、後日の補訂を期した未完成状態にあったこと、「鈴鹿本」は、編纂途中の原本を忠実に写した、いわば、原本の複本を作ろうして作成された（それも、何らかの事情で、かなり急いで書写作業が行なわれた）写本であったことが推定できるのである。また、「鈴鹿本」を綴じている紙繰について、<sup>1)</sup>C年代測定を行なった結果、一〇〇〇年から一二〇〇年の間のものと判定される紙繰

があることが判明し、「鈴鹿本」が、原本成立後、程無い頃に書写されていた可能性が高まったのである。このように、原本制作から、極めて近い距離にあったと推定される「鈴鹿本」が、奈良に伝えられていたことは、『今昔物語集』の原本が、奈良で成立した可能性を示唆するものである。また、『今昔物語集』は、成立後、約三百年、歴史上から姿を消してしまいが、その書名が初めてあらわれる『経覚私要抄』（興福寺大乘院第十八世門主、経覚の日記。宝徳二年（一四五〇）の条に『今昔物語』の書名がみえる）をはじめ、『今昔物語集』の書名がみえる、十五、六世紀の文献は、奈良に関わる文献に限られていることも、『今昔物語集』と奈良との関わりを深さを示唆している。

このように、多くの外部徴証がありながら、『今昔物語集』南都成立説が通説化しなかったのは、内部徴証が、南都成立説には必ずしも都合のよいものではなく、むしろ、天台寺院成立に都合のよいものが少なくないと考えられていたためであった。

本書は、『今昔物語集』天台寺院成立という、いわば「通説」に対し、『今昔物語集』の全巻全話にわたって内部徴証の検討を行なう、正攻法の研究方法によって、『今昔物語集』南都成立を明らかにしたものである。原田氏は、『今昔物語集』の説話内容・表現に眼を配りつつ、全巻全話を構成している思想の枠組みを考へることから、編者像に迫っていく。『今昔物語集』の編者が、何らかの仏教教義に基づいて、全体を構成したのであることは予想できても、従来、それを、すべての宗派の教理に照らし合

わせて検討しようとする論は無かった。それは、かいなでの仏教知識では、とても太刀打ちできる問題ではないからである。それを、原田氏は、『今昔物語集』全体の構成を詳細に検討仕直したうえで、南都六宗、平安二宗のすべてについて、その教理と相承を調査研究し、『今昔物語集』の構成と比較し検討したのである。このような、非常に困難かつ労力を要する検討作業をやり遂げた原田氏は、『今昔物語集』の編者が、法相宗の三時教判と四重三諦説によって、全体の構成を行っていたことを明らかにしたのである。また、原田氏は、宗派において重要視される師資相承について、『今昔物語集』の説話にみられる相承の記事と、各宗派の祖師相承系図とを比較検討した結果、『今昔物語集』では、法相宗の相承のみが、天竺から本朝まで途切れることなく、ほぼ正確にその師資相承関係が記されていることを明らかにしたのである。さらに、原田氏は、説話表現の検討から、法相宗の僧には、意識的に敬称が用いられていることから、『今昔物語集』編者が、法相宗の僧であった可能性が高いことを論じている。各宗派の教理に深く関わりながら、常に『今昔物語集』の説話表現から離れることなく、『今昔物語集』の編者像を浮かび上がらせるこれらの論証は、よほど確かな『今昔物語集』読解を前提にしなければなし得ないものである。

原田氏は、『今昔物語集』の構成が、法相宗の教理によって為されていることを明らかにした後、従来、『今昔物語集』天台成立説の主要根拠になっていた、『今昔物語集』に法華経関連説話

が多く収められていることの意味について検討していく。氏は、法相宗の祖師達も法華經の注釈書を著し、法相宗においても、法華經が重視されていたことを明らかにし、また、『法華百座聞書抄』の記事から、興福寺僧が法華講の講師を勤めていた事実をあげながら、法華經関連説話の多さが、南都成立を否定する根拠とはなり得ないことを指摘する。平安時代、法華八講が盛んに行なわれていた。南都・北嶺を問わず、唱導僧が活躍し、例えば『采花物語』巻十四「あさみどり」には、藤原道長主催の追善法華八講において、興福寺の永昭が講師を勤め、その絶妙な説法に感激した道長が、手づから御剣を賜った逸話が載せられている。この逸話は、すでに平安時代中期から、興福寺僧が深く法華經の教義を学ぶとともに、説話を駆使した説經を行なっていたことをうかがわせる。原田氏が述べる、『今昔物語集』における法華經重視の姿勢が、『今昔物語集』天台成立を示すものではなく、南都成立の徴証とも成り得るものであるという論は、興福寺における法華經の位置づけを正確に捉えての論証であり、説得力を持つ。

また、原田氏は、法華經靈驗譚とともに、『今昔物語集』本朝仏法部巻十五に多く収められている往生説話についても検討を加えていく。氏は、浄土思想は、天台宗よつてのみ説かれ信仰されていたわけではなく、南都浄土教は、平安浄土教の中でも一つの大きな流れを形成し、南都における重要な教学活動であったことを確認し、往生説話の多さが南都成立を否定する根拠とはならないことを指摘する。さらに、『今昔物語集』の往生説話の中には、極楽往生説話だけでなく、兜率天往生説話が収められていることを指摘し、このことは、かえつて、法相宗の弥勒信仰を反映したものではないかと論じる。

このように、原田氏は、従来、『今昔物語集』天台成立の根拠とされてきた事項について、南都仏教の側から、実に詳細な検証を加え、いずれも、天台成立の要件とは成り得ないことを明らかにするのである。

原田氏は、内部徴証の検討から『今昔物語集』南都成立を論じるだけでなく、院政期の南都における思想状況を検証することからも、『今昔物語集』南都成立の妥当性を論証している。氏は、興福寺の覚憲によつて作成された『三國伝灯記』から、院政期の南都における末法観、三國仏法史観を論じたうえで、『今昔物語集』と比較検討を行なっている。氏は、『今昔物語集』の末法観が、院政期を像法末と捉えていることを前提としたものであったことを明らかにし、院政期を像法末と捉えるのは、法相宗の立場と共通すること、また、三國の仏法伝来と仏法の興廃という流れの中で日本の仏法をとらえようとする姿勢は、『三國伝灯記』と共通したものであること、『三國伝灯記』に収められる説話には、『今昔物語集』所収説話との同類話が多くみられることなど、両書は多くの共通要素を有することを指摘し、その成立圏を同じくするのではないかと論じている。院政期に興福寺僧の手によつて成つた『三國伝灯記』と『今昔物語集』の内容・表現を有機的に結びつけるこの論は、非常に有力な論証として、『今昔物語集』

南都成立の可能性を大きく示唆するものとなっている。

このような原田氏の『今昔物語集』南都法相宗成立説について、唯識学を専門とする仏教学者から疑問が呈示されたことがあった。その疑問の根底にあったのは、『今昔物語集』には法華経開連説話が多く収められていることから天台系寺院成立とする、従来の『今昔物語集』編者論であった。このことは、『今昔物語集』天台成立論が、いかに根強いものであったかを示している。原田氏は、この疑問に対し、法相宗の教説を始め、種々の仏教史料に広くあたりながら、実に真摯に、また丁寧に一つ一つの疑問に答えている。本書第四編の四論文は、その疑問に答えたものであるが、疑問に答えた諸論は、結果的に、氏の南都成立説をさらに補強するものとなったのである。

原田氏の『今昔物語集』南都成立論は、はやく歴史学の分野から注目されていた（追塩千尋氏『今昔物語集』と南都仏教』『日本宗文化史研究』一卷二号、一九九七年十一月）。さらに、近年では、『今昔物語集』の成立や編者像を論じる際には、『今昔物語集』における法相宗重視の姿勢は無視できない問題となっている。岩波書店、新日本古典文学大系『今昔物語集 三』の解説が、「法相重視の姿勢はあるいは『今昔』の成立事情と関わっているのかもしれない」としているのも、原田氏の諸論と無縁のものではない。また、小学館、新日本古典文学全集の解説では、『今昔物語集』の成立圏を、はつきりと興福寺内に想定している。

原田氏の『今昔物語集』南都成立論が、一書に纏められたこと

によって、これまで外部徴証が中心であった『今昔物語集』南都成立説に、強力な内部徴証論が加わることになった。本書により、『今昔物語集』南都成立の可能性が、極めて高くなったといえよう。

原田氏は、今後、南都の唱導と説話文学の関係を追究し、文学という枠を越え、南都文化圏全体の問題として『今昔物語集』の存在を考えていく予定であるという。氏の手堅い研究によって、院政期から鎌倉期における南都仏教文化の様相が、さらに明らかになることであろう。

なお、本書は、平成十六年度学術振興会科学研究費による出版助成を受けている。

（勉誠出版 二〇〇五年三月 四八〇頁）

本体価格 一五、五〇〇円）

（たなか・のりさだ 駒澤大学教授）